

図書館における連携・協力を生かした地域づくり

秋山 美和子
(高崎市市民活動センター)

【要旨】

高崎市立群馬図書館（以下、「群馬図書館」という）は、高崎市立図書館の地域図書館である。筆者は、平成 21 年 4 月から 26 年 3 月まで群馬図書館に勤務した。この時期は、平成の大合併、東日本大震災などを経てあらためて「地域」を見つめなおし、地域づくりを推進していこうとする時期と重なっていた。同図書館では、図書館は地域を支える情報拠点であるという視点に立ち、学校連携、地域の魅力の再発見、郷土資料作成などに取り組んだ。これらの取組では、図書館の資料の提供を基本として、市民、各種団体、他の行政機関などと連携・協力して事業を推進するよう配慮した。この取組から、図書館は、市民の生活に寄り添い、地域づくりの拠点としての役割を担う重要な社会教育・生涯学習施設であることが明らかになった。

1. はじめに

筆者は、昭和 62 年 4 月に群馬県群馬町役場に行政職員として採用され、平成 18 年 1 月の合併により高崎市の職員となり、平成 21 年 4 月から 5 年間、群馬図書館長を務めた。

筆者は、この 10 年間に 2 度、「地域」について深く考えさせられる経験をした。1 度目は、平成 17 年度にピークを迎えた平成の大合併である。筆者のふるさと群馬町は、昭和 30 年代に 1 町 3 村が合併してできた町である。この時、上郊村は群馬町に合併してなくなった。上郊村保渡田出身の歌人・土屋文明は、ふるさとの村に対する感慨を「村の名といへど百年たもたぬかなくなりてゆく群馬郡上郊村」¹⁾と詠んだ。平成の大合併でも、慣れ親しんだふるさとの名前が消えるという経験は、合併反対、賛成の立場に関わらず、人々の心の中に少なからぬ喪失感を生じさせた。筆者は、合併前後の 7 年間で議会事務局で勤務し、合併に至る調整過程や新市建設の揺籃期の議論を身近に体験したことで、市民のふるさとの想いを痛切に感じる事ができた。

2 度目は、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所の事故である。連日報道される被害状況を目の当たりにし、多くの人々はただただ茫然とするばかりであった。ふるさとの風景、当たり前のようにあった日常、尊い人命が失われ、日本中が深い悲しみにつつまれると共に、被災地と被災された方々の一日も早い復興を願った。

これらの経験を通し、筆者は「地域」を強く意識すると同時に、どのように地域づくりを進めていくかという課題に直面しながら、群馬図書館長としての職務に当たった。

生涯学習社会を支える施設には、公民館、図書館、博物館、生涯学習センターなどがある。平成 24 年 12 月に施行された「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」²⁾では、「市町村立図書館は、知識基盤社会における知識・情報の重要性を踏まえ、資料(電磁的記録を

含む。以下同じ。)や情報の提供等の利用者及び住民に対する直接的なサービスの実施や、読書活動の振興を担う機関として、また、地域の情報拠点として、利用者及び住民の要望や社会の要請に応え、地域の実情に即した運営に努めるものとする」と、運営の基本的なあり方が提言された。図書館は公民館や博物館と同じ社会教育・生涯学習施設であり、各種の集会活動や行事を通して、人々に学習の機会や場を提供することが求められる。中でも、図書館サービスの最大の特長は、資料や情報を利用者に直接提供することによって、生涯学習を支援する点である。このような視点に立ち、群馬図書館長として取り組んだ事例をいくつか紹介し、図書館の意義と図書館が地域づくりに果たすべき役割について述べたい。

なお、事業に取り組む過程での考え方や実施後の意見・提言などは、あくまでも個人的な見解であり、所属する組織とは無関係であることを申し添えておく。

2. 地域と図書館の概要及び群馬図書館の取組

高崎市は、この10年間に3度合併した。平成18年1月に群馬町、箕郷町、新町、倉渕村と、同年10月に榛名町と、平成21年6月に吉井町と合併し、現在に至っている。群馬図書館の状況を理解するため、最初に高崎市と群馬地域(合併後の旧市町村は地域という)、次に高崎市立図書館と群馬図書館の概要を述べた後、群馬図書館の取組を報告する。

(1) 高崎市と群馬地域の概要

高崎市は日本列島のほぼ中央部に位置し、東京から約100kmの距離にあり、古くから交通の要衝として栄えた。合併後の面積は459.16km²で、飛び地の新町地域で埼玉県に、倉渕地域で長野県に接している。平成27年3月末現在の人口は374,905人である。群馬地域は面積21.94km²と狭いが、市の中央部に位置し、40,839人が暮らす。関越自動車道前橋インターチェンジから近く、生活環境に恵まれたコンパクトな街で、人口が増加し続けていることから、高崎市の副都心と位置付けられている。

合併には大変な労力が必要であり、ほとんどの合併町村で地域を二分する激しい議論の末の決断があった。そのため、合併後の地域づくりとして、『新市建設計画(平成17年度～平成27年度)』³⁾の中で、「地域の個性を尊重しつつ地域の一体性を高める施策」を推進することが基本方針として掲げられた。そして、「地域の財産や地域の独自性、地域に対する住民の想いを大切にし、将来に夢と希望が持てる地域の特色を生かした合併」であることが強調された。また、地域別の整備方針では、高崎地域が都市拠点ゾーンとされたのに対し、群馬地域は、国指定史跡・保渡田古墳群や三ツ寺I遺跡、上野国分寺跡などの存在が示すように、古代上毛野の中心的な場所であり、詩人・山村暮鳥、歌人・土屋文明を輩出していることから、歴史文化ゾーンに指定された。

(2) 高崎市立図書館と群馬図書館の概要

高崎市における図書館の状況であるが、合併した5町1村のうち5町には町立図書館があったため、合併後は旧高崎市立図書館を中央図書館とし、旧町立図書館5館を地域図書館として6館体制となった。群馬図書館をはじめとする第一次合併の地域図書館の場合、平成19年5月の高崎市立図書館へのシステム統合、平成20年4月の開館時間統合と職員

の勤務時間の変更というように、数年間は合併後の調整が続いた。さらに、平成 23 年 3 月には IC タグを導入した新システムが稼動し、同年 4 月に中央図書館が新館オープンした。

次に群馬図書館の概要であるが、建物は地上 2 階地下 1 階の単独施設で、建物面積は 1,738m²である。筆者が勤務していた平成 24 年度の群馬図書館の主な統計(カッコ内は高崎市立図書館の合計)は、蔵書冊数 130,415 冊(982,863 冊)、登録者数 8,497 人(145,088 人)、新規登録者数 794 人(15,478 人)、貸出冊数 219,521 冊(1,878,604 冊)、資料費 7,565 千円(78,000 千円)、レファレンス 2,271 件(14,487 件)となっている。職員は、正規職員 2 人、非正規職員 9 人の 11 人体制で、司書は筆者の他、嘱託職員 2 人の計 3 人であった。

1) 図書館改革のために

筆者が群馬図書館長となった当時は、まだ、合併後の地域づくりをどうしていくかという議論が盛んに行われていた時期であり、合併地域に置かれた支所(旧町村役場)と共に地域図書館が地域づくりの拠点となる必要があった。しかし、職員は、数年にわたる環境の変化により疲弊し、日々の業務をこなすのが精いっぱい状況であった。そこで、いくつかの図書館改革案を職員に示して実践することから始めた。

1 点目として、公立図書館の意義や必要性を十分認識し、市民に役立つ図書館とは何かを具体的に考えることである。与えられた業務を遂行するだけでなく、職員全員が、「市民のため」という目的意識をもった仕事をするように伝えた。

2 点目として、図書館内連絡会議で関係法規や報告書を学び合い、意見交換を行った。

3 点目として、職員一人ひとりが能力を発揮できるように、意見やアイデアを出しやすい環境をつくった。「旬情報コーナー」で市民の求める情報、市政関連情報を速やかに提供することによって職員の情報収集能力を高めたり、「特集コーナー」で資料提供に関する職員の感性を磨き、市民に資料に対する新たな視点や資料選びのコツを提供したりした。

4 点目として、さまざまな人や機関と連携・協力することである。まずは身近なボランティアと意思疎通を図り、信頼関係を築くことから始め、この中から、後述するように、市民、ボランティア、各種団体などの協力を得ながら新規事業を立ち上げていった。

5 点目として、幅広い広報活動を推進した。特に地元メディアを積極的に活用すると共に、さまざまな機会を捉えて図書館の取組を発表し、理解者・協力者を増やしていった。

2) 群馬図書館の具体的な取組

第一に、図書館の基本は、資料の収集・保存・提供であるため、まずは蔵書構成を知り、自館の強み、弱みを分析した。その上で、常に新鮮な書架を保つために、思い切った除籍を行い、課題解決型図書館として必要とされる資料への買い替えを促進した。そうした中で、レファレンス件数が多いにも関わらず、郷土資料が古く少ないことに気づき、郷土資料を積極的に収集し、資料がなければ図書館が作成していくことを目指した。

第二に、学校との連携を推進した。特に、教員研修、社会科見学、職場体験、インターンシップを積極的に受け入れた。教員研修では、職員と教員が協力して、図書館・学校双方に役立つ資料を作成した。例を挙げると「理科自由研究の進め方」、「読書感想文の書き方」というパンフレットを作成し、この成果を生かし、教員の協力を得ながら二つの講座を開催した。一つ目の「わくわく自由研究」では、小・中学生を対象に、身近なものを科

学的な視点で捉え、理科に興味を持つ子どもの育成を目指した。教員が、子どもたちの学年や学習歴、興味・関心の対象などをもとに自由研究のテーマをアドバイスし、簡単な実験を行った。職員は、理科の実験や観察、そのまとめ方の参考となる資料を提供して教員を補助した。二つ目の「すらすら読書感想文」では、初めて読書感想文を書く小学校低学年を対象に、親子での参加を募った。最初に、職員がブックトークを行い、本の紹介と選び方のヒントを与え、本を決められない子どもには読書相談を行った。その後、教員が、親子で本の内容について話し合いながら読書感想文に取り組めるように、本を読む視点と文章にまとめるコツを指導した。この二つの講座は、職員と教員が相談し、工夫しながら継続して実施することができた。

また、小・中学校の図書館指導員と、子どもの読書活動について定期的に情報交換会を開催し、学校図書館の現状やニーズを知って、児童書の選書に役立てた。予算が少ない学校図書館のために、必要な資料を団体貸出して支援した。群馬県立図書館地域協力係の協力を得て、新設小学校の図書館づくりのコーディネートも行った。

第三に、読書週間やこども読書週間のイベントとして発表会・交流会を開催し、市民や図書館内で活動する自主グループ、図書館主催講座の受講者と連携・協力を図った。

3. 連携・協力を生かした3つの事業

以上述べてきた日々の活動の上に、『これからの図書館像～地域を支える情報拠点をめざして～（報告）』⁴⁾で指摘されている図書館は「地域を支える情報拠点」であり、「地域や住民に役立つ図書館」でなければならないという視点に立った事業を検討した。群馬図書館として、具体的に市民や地域のために何ができるのかを考え、市民、各種団体、他の行政機関などと連携・協力して地域づくりを推進した事例を、3つ紹介する。

(1) 地域資源を地域づくりに活かす「地域のたからもの発見隊」

平成22年度は、高崎市制110周年の年にあたり、市を挙げて記念事業が実施された。その際、予算を獲得して取り組んだのが「地域のたからもの発見隊」事業である。この事業の内容は、5項目からなっている。以下、その詳細について報告する。

1) 地域に関するクイズの実施

郷土資料の「群馬町かるた」⁵⁾を活用して、「ふるさと再発見クイズ」を30問作成した。群馬県といえば全国的に「上毛かるた」⁶⁾が有名だが、市町村単位でも郷土かるたが盛んに作られており、高崎市内では、群馬地域のほか高崎地域、吉井地域にもある。郷土かるたは、後世に伝えたい事柄を選定して紹介しているため、地域を知るには有効な資料である。

具体的な作業の手順として、職員が44枚の読み札の中からクイズになりそうな30項目を選び、出題内容を検討してクイズを作成した。答えは三者択一方式で、正解以外の選択肢に市内の他の地域に関連した事柄や場所などを取り入れ、身近な地域を理解した上で、他の地域へと関心が広がるように工夫した。そうすることで、クイズの内容に関心を持った市民が実際に現地へ赴き、見たり聞いたりして学習することができる。市民が市内を歩き交うことで地域間交流が促進されると考え、図書館内に観光パンフレットや施設の案内などの関連情報をできるだけ収集して提供した。

このクイズは、主に群馬図書館のカウンターで利用者に手渡した。自分で答え合わせができるように、クイズの用紙の裏面に正解を載せたが、子どもたちが職員のところへ採点をしてもらいに来て、会話を交わす様子が見られた。図書館の他には、群馬地域内の公共施設や学校などを中心に設置の依頼をしたり、各種団体に対しては会員への配布を働きかけたりして約2,000枚のクイズを配布した。

2) 地域の「たからもの」の募集

市民は、具体的に何を地域の「たからもの」と考えているかを知るため、上述したクイズの用紙にアンケート用紙を挟んで配布し、「たからもの」についての意見を集めた。アンケートでは、「あなたの考える地域のたからものは何か」と問い、その理由の記入欄も設けた。アンケートは無記名で、集計しやすさを考えて年齢と性別、居住地域のみを問う方法をとった。アンケート用紙は199枚回収でき、複数回答により217件の意見が集まった。この事業に熱心に取り組んだ小学校や学校図書館があったおかげで、半数以上が中学生以下の子どもの意見となった。子どもであっても、ふるさとに誇りと愛着を持っていることが理解でき、予想以上の結果を得ることができた。さらに、群馬地域の祭りに図書館として参加し、市内外からの来場者を対象にクイズを実施し、「たからもの」に関する意見の聞き取りをした。

この取組により、市民が、保渡田古墳群や上野国分寺を誇りに感じていること、獅子舞、神楽などの伝統行事を大切に守り伝えたいと考えていること、福田赳夫元内閣総理大臣や山村暮鳥、土屋文明といった郷土の偉人に親しみを感じていることなどが分かった。特に赤城、榛名、妙義の上毛三山を遠くに望む景観を「たからもの」に挙げた意見が多く、風景は、人々の心の中に深く刻み込まれ、ふるさとを象徴するものになっていることが強く印象付けられた。

3) 「ふるさと再発見講演会」の開催

「たからもの」に関連して、「ふるさと再発見講演会」を2回開催した。

第1回は、群馬県の絹産業に造詣が深く、「群馬町かるた」にも取り上げられている江戸小紋の伝統工芸士・藍田正雄氏に、「ふるさとと伝統工芸」というテーマで講演を依頼し、同氏のご厚意で、作品の着物、展覧会にも出品したことのない貴重な伊勢型紙や江戸時代の袴のコレクションを、図書館内に展示することができた。

第2回は、群馬県における郷土史の大家で、群馬県史をはじめ数多くの市町村史(誌)の編纂に関わった、高崎市立かみつけの里博物館の初代館長・近藤義雄氏(故人)に、上野国分寺についての講演を依頼した。

それぞれの講師が、地域のたからものといえる方々であった。

4) パンフレット『みんなで考える地域の「たからもの」』の作成

このパンフレットは、筆者を中心に職員が作成した。群馬図書館には子ども向けの郷土資料が少なく、小・中学校でも、総合的な学習の時間や調べ学習などに使う郷土資料を集めるのに苦労していると聞き、学校のニーズにも応えられる内容とした。

パンフレットの内容を一部紹介すると、群馬地域は、群馬の地名の元となった古代の豪

族・車持君が住んでいた場所である。上越新幹線建設工事に伴う文化財発掘調査で、車持君が住んでいたとされる館跡・三ツ寺I遺跡が見つかった。近くには保渡田古墳群があり、館跡と墓がそろって発見されたのは全国的にもめずらしく、社会科の教科書に取り上げられている。そして、毎年秋には保渡田古墳群を舞台に、かみつけの里博物館学芸員の研究成果を生かし、ボランティアによる再現劇「王の儀式」が上演されている。

この流れを、クイズとその解説文、写真、市民から寄せられた声をまとめて、パンフレットに掲載した。クイズの30項目については、できるかぎりこのような形式を採った。「たからもの」の内容は多岐にわたり、30項目に収まらなかった意見はまとめて巻末に載せた。

かみつけのくに

問 5世紀頃、上毛野国を支配していた王様は？

くるまもちのきみ

答 車持君

今からおよそ1500年前、榛名山東南一帯を治めた車持氏と呼ばれる王族がいました。保渡田古墳群はその王たちが眠る場所です。
(以下省略)



声 再現劇「王の儀式」を見ると、古墳時代の様子がよく分かります。

八幡塚古墳の上に王や巫女などが並んだ姿は美しく、王の国褒めの言葉を聞くど涙が出るほど感動します。



図1 パンフレット掲載内容(一部省略)

パンフレットを作成するにあたり、職員が市民や関係団体などに事業の趣旨を説明して聞き取り調査を行い、関連団体、企業から写真提供を受けるなど、群馬地域内の多くの市民を巻き込んだ事業となった。この事業に関心を持った市民から、古い郷土資料が持ち込まれることもあった。

このパンフレットは、地域の小・中学校、公共施設や行政関係者、議員、文化協会の役員などへ配布し、高く評価された。小・中学校では、総合的な学習の時間や学校図書館で活用が図られた。ある地域では、このパンフレットをテキストにして勉強会が開催され、「たからもの」に関連したレファレンス件数が増加した。

5) 取組成果の発表と講演会・セミナーの開催

取組成果の発表では、中学生以下の子ども、男性、女性と色分けした付箋に「たからもの」についての意見を書き出して、項目ごとにパネル展示すると共に、関係する場所を明示した地図を貼り出した。また、図書館の資料や各種パンフレットなども並べて市民に提供した。利用者が、熱心に展示を見たり、資料を手にとって読んだりする姿が見られた。

最後が、講演会とセミナーの開催である。「地域のたからもの発見隊」を、地域の資源を再認識する活動として進めてきたが、それをどのように地域づくりにつなげるかという視

点で、高崎経済大学地域政策学部の櫻井常矢教授が講演した後、参加者が自由に議論した。参加者から、「地域資源を知ることは活用につながり、地域が活性化する」という意見が出され、一定の成果が上がった。

(2) 地域の記憶を記録する「手作り紙芝居」

1) 震災と図書館

1年間を通して、市民と共に「地域のたからもの発見隊」事業に取り組み、地域に役立つ図書館として、さらなる一步を踏み出そうとしていた平成23年3月11日に、東日本大震災と、それにもなう福島第一原子力発電所の事故が発生した。幸いにも群馬図書館は直接的な被害がなかったものの、その後しばらくは、計画停電による不安定な開館を余儀なくされた。こうした中でも、群馬図書館の利用者は増え続け、図書館は地域の人々の心の拠りどころであると実感した。

図書館としてできることは何かを職員と話し合い、平成23年度の群馬図書館のテーマを「勇気、元気、希望」として事業に取り組むことを決定した。その一環として、上武大学駅伝部を箱根駅伝へと導いた花田勝彦監督の講演会を企画し、上武大学駅伝部が撮影協力した映画のDVDや原作の本、ポスター、パンフレットのほか、ユニフォームや箱根駅伝で実際に使用した襷などを展示し、さまざまな角度から資料を提供した。

被災地の図書館の被害状況が明らかになるにつれ、あらためて図書館は地域の記憶と記録を収集・保存し、後世に伝えていく使命があると強く感じた。被災した直後は心のケアや生活の再建が最優先であるが、将来的に地域の復興を考えたとき、歴史、伝統行事、偉人など、その地域のアイデンティティに関わる資料が必ず必要になる。それは非常時だけの問題ではなく、平常時でも情報は絶えず生まれては消え、人々の記憶も次第に薄れていく。我々が努力して残さない限り、情報は後世に伝わらないという事実を、今更ながらに考えさせられた。

このようなことから、資料の収集・保存・提供を柱とした、図書館ならではの地域づくり活動を展開したいと考えた。

2) 手作り紙芝居の取組と新たな生涯学習活動

後世に伝えたい地域の歴史や伝統行事、偉人などを紙芝居にして演じることで、子どもたちの地域学習に繋がり、ふるさとの記憶として残る。また、お年寄りには、伝統行事などの紙芝居は、懐かしさを持って受け入れられると考えた。紙芝居は比較的簡単に作成でき、誰でも親しみやすいので、記録として残し、活用していくのに適した資料である。

この構想を読み聞かせボランティアに話したことがきっかけで、全国的な手作り紙芝居コンクールで賞を受賞した市民、群馬地域内の6公民館の主事を巻き込んで、手作り紙芝居事業を推進することになった。さらに、平成25年8月に、全国紙芝居まつり群馬大会（主催：第13回全国紙芝居まつり群馬大会実行委員会）が、伊香保温泉をメイン会場として開催されることが決定し、群馬図書館の読み聞かせボランティアと利用者が実行委員会の中心的メンバーであったことから、群馬地域を挙げてこの大会を応援することになった。

平成23年度には、群馬図書館と群馬地域内の6公民館との共催で、講演会「紙芝居を楽しもう」を2回開催した。第1回が紙芝居の歴史、手作り紙芝居の魅力の講演、第2回が

紙芝居の実演と演じ方の講習で、講師は県内各地の全国紙芝居まつり群馬大会実行委員（以下、「紙芝居まつり実行委員」という）が務めた。

平成 24 年度には、紙芝居作家の荒木文子氏を講師に迎え、群馬図書館で 3 回シリーズの手作り紙芝居講座を開催した。この講座では、講師の補佐役で紙芝居まつり実行委員が受講者の指導に当たった。夏休みには、紙芝居まつり実行委員が講師となり、子ども向けの手作り紙芝居講座を開催した。各講座の最終日には、自作の紙芝居を発表した後、交流会を開いて感想を述べ合った。大人にとっても子どもにとっても、褒められる体験は貴重で、この感動が次の活動へと結びついていった。子ども向けの講座の際、ある悩みを抱えた母親から「子どもの心に気づかされた」という言葉が発せられ、思わぬ課題解決に結びついた事例もあった。

紙芝居作りでは、絵を描く、脚本を書く、演じるという三つの作業が必要で、それぞれの段階で図書館の資料を活用した学習が行われた。例えば、絵を描くためには、図鑑やイラスト集、写真集が活用され、効果的な表現方法を学ぶために実際の紙芝居が参照された。必要な時に、すぐ資料を手にとって見られるのが、図書館で事業を実施する強みである。

この手作り紙芝居講座の中から、全国紙芝居まつり群馬大会の発表者が誕生し、公民館の中に手作り紙芝居の自主グループが立ち上がった。その後も、このグループのメンバーが、図書館に方言、地域の歴史や風習、昔話などさまざまな事を学びに来るようになった。さらに活動の幅を広げ、ボランティアとして福祉施設や高齢者のためのサロンで紙芝居を演じ始めたメンバーがいる。彼女の活動は、地域の役員たちからも評価され、歓迎されている。

手作り紙芝居の取組から派生して朗読講座を開催したところ、講座終了後に自主グループへと発展し、現在も 20 人ほどが群馬図書館で熱心に学び続けている。そして、読書週間に合わせて朗読発表会を開催し、日頃の学習成果を披露する。病院勤務の受講者が、「朗読で入院患者を元気づけたい」と参加動機を語った。一人ひとりの自主的な生涯学習を支援することで、結果として多くの市民や地域のための活動に繋がっていく。市民との会話によって多様な学習ニーズを捉え、図書館の資料を使ったさまざまな企画を事業化していくことが大切であろう。

(3) 市民・行政に役立つ「地域づくりカフェ」

次に、「地域づくりカフェ」の取組である。この事業は、その時々テーマを決めて、地域づくりのための話し合いを持つものである。平成 26 年 1 月に第 1 回「地域のコミュニティを考える～東日本大震災における被災地復興支援の経験を生かして～」を開催した。震災や原発事故、被災地、被災された方々のことが急速に忘れ去られようとしている現実の中で、図書館として取り組むべきことを検討し、実現したものである。

高崎経済大学地域政策学部の教授と学生たちの協力を得て、福島県内の自治体に対する復興支援活動の報告を聞いた後、5、6 人のグループに分かれて、群馬地域のコミュニティのあり方を検討するという内容にした。全国で初めて「地域政策学」⁷⁾を掲げて設立された同学部は、教育目標として「地域が直面する諸問題を解決するための能力の育成」を挙げており、学生と図書館がこのような事業で連携・協力することには、大きな意義があった。

当日は、学生がワークショップのファシリテーターを務め、教授が総括をした。学生が

ファシリテーターとなることで、参加者全員が話しやすい雰囲気になることが分かった。当日は、群馬地域内の区長・嘱託員や民生委員・児童委員、地域審議会委員といった地域の中心的な役割を担うメンバーが多く参加した。この中には、初めて図書館に来たという人もいて、図書館の取組みを周知するよい機会になった。高崎市教育委員会教育委員長も一市民として参加し、この取組は高く評価された。

「地域づくりカフェ」を図書館で行う意義は、第一に、直接課題を解決することはできなくても、図書館の資料や情報を通して、市民の生涯学習、地域づくりのきっかけをつくらせたり、ヒントを与えたりする支援ができること、第二に、課題が明確になり、必要が生じた場合には、行政機関の担当に繋ぐことができる点が挙げられる。さらに、担当と政策立案の過程から連携し、テーマを決めて「地域づくりカフェ」を実施することによって、市民にも行政にも役立つ図書館となれる。

以上の点を踏まえ、図書館の利点を最大限活用して、教育、子育て支援、高齢者福祉、環境、防犯・防災など、その時々ニーズに合わせたテーマで、参加者層も広げながら、この事業は継続していけるであろう。

4. 市民・地域に寄り添う図書館づくり

最近の図書館では、話題性のあるニュース、イベント情報などを取り上げた特集コーナーを設置するケースが多い。自治体の政策に合わせて、広報やポスター、チラシ、関係する資料を並べて展示することで、政策に関心を持つ市民が増えることが期待される。さらに、集会室を活用して「地域づくりカフェ」のような事業を実施すれば、地域自治の確立に役立つであろう。

図書館の職員は、図書館内に留まっているのではなく、資料を持って外に出ていくことが重要である。たとえば、筆者が現在勤務する高崎市市民活動センターの中には、地域人材支援センター、市民公益活動促進センター、男女共同参画センターがある。各センターが開催するセミナーや講演会などに図書館の資料を提供し、図書館の意義をアピールすることを通して、各種団体、NPO、ボランティアと連携した事業を実施する機会が広がるであろう。

身近な地域にある社会教育・生涯学習施設の中でも、公民館は団体活動が中心で、図書館は個人学習が中心である。図書館のように、目的がなくても立ち寄れて長居できる場所は案外少ない。この「場所」があるということが、非常に重要である。図書館の日常の中で、カウンターで何気なく交わされる会話やレファレンスに、地域の人々の悩みや思いが表わされていることが多い。そうした思いに寄り添い、解決していくことが図書館における地域づくりの第一歩である。

図書館にできることは、第一に、資料の収集・保存・提供である。市民生活に直接役立つ課題解決のための資料を収集し、提供していくことが役割のひとつであり、それと同時に、地域の記憶と記録を収集・保存し、地域の未来に責任を負う施設であるという認識に立たなければならない。パンフレット『みんなで考える地域の「たからもの」』は、郷土資料として登録し貸出しているもので、誰もが手に取って見ることができる。手作り紙芝居の取組で寄贈された作品は利用率が高く、幼稚園・保育園・小学校などの読み聞かせに活用されているようである。平成26年度から施行された『高崎市子ども読書活動推進計画』⁸⁾

の中に「郷土を愛するたかさきっ子の育成」が掲げられ、図書館が子ども向けの郷土資料を作成していくことが予定されており、今後さらに資料の充実が図られるであろう。

第二に、きっかけづくりである。地域づくりといっても、観光振興、環境、福祉、教育などテーマは多岐にわたる。一人ひとりが、自分なりのテーマをもって、次の一步が踏み出せるような「気づき」のある事業を実施し、さまざま側面から、図書館の資料を通して市民の生涯学習や地域づくり活動を支援していくことが重要である。

5. おわりに

図書館にはあらゆる分野の資料が揃っており、工夫次第でどのような取組でも可能である。職員自らが社会情勢や自治体の政策、地域の実情などに関心を持ち、幅広い人々と交流していくことで新たな事業が生まれる。市民との会話を通し、今何が必要かを把握して図書館サービスを提供していくことが、地域づくりに繋がる。その際、市民、各種団体、他の行政機関などとの連携・協力が不可欠であり、そうすることでより大きな力が発揮できる。

最後に、ボランティアをはじめ多くの地域の方々、また、職員に支えられながら群馬図書館の運営ができたことに、深く感謝したい。筆者は現在、図書館を離れているが、在職当時、図書館における地域づくりについて夢を語り合い、協力し合いながら事業を推進してきた方々との繋がりや、現在の仕事にも生かされ大きな支えとなっている。

今後とも、「市民のため」という一点を忘れず、地域の情報拠点として、市民や地域に役立つ図書館であってほしい。

注記・引用文献

- 1) 土屋文明『歌集青南集』短歌新聞社、1996、p. 155
- 2) 文部科学省「図書館の設置及び運営上の望ましい基準（平成 24 年 12 月 19 日文部科学省告示第 172 号）」、(http://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/1282451.htm、2015 年 8 月 1 日参照)
- 3) 高崎地域合併協議会、高崎市・箕郷町合併協議会『新市建設計画（平成 17 年度～平成 27 年度）』2005
- 4) これからの図書館の在り方検討協力者会議『これからの図書館像～地域を支える情報拠点をめざして～（報告）』文部科学省、2006、p. 1
- 5) 群馬町かるた編集委員会「群馬町かるた」群馬町、2001
- 6) 上毛かるた編集委員会「上毛かるた」群馬文化協会、1968
- 7) 高崎経済大学「学部 地域政策学部」
(<http://www.tcue.ac.jp/college/rp/index.html>、2015 年 8 月 1 日参照)
- 8) 高崎市子ども読書活動推進計画策定委員会『高崎市子ども読書活動推進計画一つなげよう小さな活字を大きな夢にー』高崎市教育委員会、2014、p. 32